

## 【随筆】

## 続 曜変天目

齋藤 淳

## はじめに

本稿は 2011 年の LEC 会計大学院紀要第 9 号に掲載させていただいた「世界に三つの曜変天目」(以下、前稿と呼ぶ)の続編である。前稿では、曜変天目とは、曜変天目は幾つあるのか、南宋でつくられたものなのになぜ日本にしかないのか、偶然できたのか意図的につくったのか、再現できるのか等について検討し、世界に三腕しかないもののうち、静嘉堂文庫美術館と藤田美術館所蔵の二碗についての鑑賞記と、残る大徳寺龍光院所蔵のものを観ることが出来ずにいる繰り言を書き連ねたが、この度漸く最後の曜変天目茶碗を観ることが出来たので、全くの私事ではあるが喜びをもってこのテーマを完結させたいと思う。

前稿で詳しく触れているが、曜変天目茶碗について概略をおさらいするために、前稿出稿の後刊行された「ニッポンの国宝 100 国宝ファイル 8 曜変天目」(小学館 2017)から抜粋要約しておこう。

鎌倉時代以降、中国の浙江省にある天目山に学んだ僧侶が日本に持ち帰った黒釉茶碗を「天目」と呼び、後に黒釉の掛かった喫茶用の茶碗全般が「天目茶碗」と呼ばれるようになった。天目茶碗の内、南宋時代(12~13世紀)に福建省の建窯(けんよう)で焼かれたものが「建盞(けんさん)」である。小さな高台(底の部分)をもち、すり鉢型のいわゆる「天

目形(てんもくなり)」といわれる端正な形と、鉄分を含む釉薬で黒く発色した艶のある色合いに特徴がある。この中に、ごくまれに見込み(内側)の釉に星のような大小の丸い斑文が密集して浮かんだものがある。斑文を取り巻く青や藍色、光によって瑠璃色の光彩を放つものが「曜変天目」といわれる。大きさは、高さ概ね 7 cm 前後、口径 12 cm ちょっと。宋の時代の茶は白かったので黒い茶碗がいいとされたようである。

## 世界に三腕しかない宝の 4 点目出現騒動

2016 年 12 月 20 日 OA のテレビ東京の人気番組「開運!なんでも鑑定団」で、徳島県の H. H. さんが鑑定に出した茶碗についてテレビでもおなじみの鑑定歴 55 年(当時)の古美術鑑定家中島誠之助氏(い〜仕事してますネ が口癖のひげの鑑定士です)が、出展者の自己評価額百万円に対して、25 百万円の鑑定評価額をつけたうえで、「番組始まって依頼の最大の発見だ 12~13 世紀南宋福建省の建窯で焼かれたものに間違い御座いません」と、例の名調子で断言した。「今日これが出たことによって、(世界に三腕しかない曜変天目茶碗の) 4 点目が確認された。漆黒の地肌に青みを帯びた虹のような光彩がむらむらと湧き上がっていて宇宙の星雲をみるようですね……

大銘品です。」と絶賛。

番組で紹介された茶碗の由来は、室町時代の摂津国守護代三好長慶（1522-1564）の子孫から譲り受けたものだとのこと。

日本経済新聞でも「曜変天目茶碗 4 点目か」として、「徳島県のラーメン店経営の男性が番組に鑑定を依頼。大工をしていた男性の曾祖父が、戦国武将・三好長慶の子孫が暮らす屋敷の移築を請け負った際、買い受けた骨董品に交ざっていたらしい。」と紹介している。

（2016 年 12 月 21 日日経）

しかし、私がテレビ画面で見える限りでは、黒い天目地に外側は一部青と桃色が混じっては見えるが内側は失礼ない方で恐縮だが白い汗染みが出ているかのような代物で斑文にもなっていない、そもそも美しさが感じられず、実物を見たプロの鑑定家の上記の表現はどうにもしっくりこない。

同番組の 2019 年 4 月 30 日 OA、放送 36 年目の「平成お宝大公開 SP」なる特番で、今まで番組に登場した鑑定人が心に残る一品を各人挙げるなか、中島誠之助氏は「番組始まって依頼の最大の発見」であったはずの上記茶碗ではなく古九谷の皿を挙げていた。あの茶碗はご本人にとって第一のものではなかったということなのか、何らかの事情で挙げにくかったのか、それはわからない。

そもそも、なぜ 25 百万円などという評価額をつけたのかも解せない。

競売会社クリステイズが 2016 年 9 月 15 日に米国ニューヨークで行った競売で、安宅コレクションなどを経て個人コレクターが所有していた中国南宋の油滴天目茶碗が 1,170 万 1,000 ドル（約 12 億円）で落札された。（2016 年 9 月 18 日読売）

前稿でも触れた「君台観左右帳記」によれば、曜変は油滴の 2 倍の価値があると記されている（2017 年 3 月 16 日読売）ことからしても、第四の曜変天目茶碗だと絶賛しながら 25 百万円という破格に安いと思える評価額をつけているのは全く解せない。もし 2016 年 12 月の番組収録が 9 月半ば以降だとしたら、油滴天目の落札価格は知れ渡っていたはずで、世紀の大発見と絶賛しながら、なぜかとも安い評価額をつけたのか理解に苦しむ。

かかる疑問を持ったのは私だけではないようで、曜変天目茶碗の再現を目指していると前稿で取り上げた愛知県瀬戸市の陶芸家、長江惣吉氏（54）が、2017 年 2 月にテレビ東京に対して①複数の専門家による茶碗の再鑑定②曜変天目茶碗と鑑定した根拠の提示③根拠が示せない場合は鑑定の白紙撤回、を求めたが、期限までに回答を得られなかったとして、放送倫理・番組向上機構（BPO）の放送倫理検証委員会に番組内容についての検証を要望した。これに対して、テレビ東京の編成局長は記者会見で「鑑定結果は番組独自の見解。結果の訂正や本質的な鑑定をやり直すことはない」としている。（2017 年 3 月 4 日読売）

所詮は民放のバラエティ番組であり、鑑定評価は出展一件につき必ず一人の鑑定士しか係わらないため、鑑定としては必ずしも確かなものともいいきれない。そもそもが骨董品の鑑定なるものが、客観的に合理性ある確実なものとは言い難いようである。聞くとところによると刀剣の鑑定なども 10 人の鑑定士が鑑定して全員の見解が一致することは滅多になく、多数決で真贋が決まるとか。番組の性格上致し方のないところではあるが、命をかけて曜変天目茶碗の再現を試みている陶芸家からしたら番組の鑑定結果は許せないというのも理解できる。

古陶磁の鑑定には、国家資格があるわけではない。経験を積んだ古美術商や研究者が検分し、鑑定書を発行したり、碗を収める箱に銘や作者などを書き記す「箱書き」を施したりするのが一般的だ。・・曜変天目茶碗の・・鑑定のポイントとして、①地が黒の碗の内側に星のような大小の斑点が広がっている②斑点の周囲が瑠璃色に輝く③光の角度によって碗の内側が様々な色に変化するなどの点が挙げられる。いずれも室町時代に足利将軍家の所蔵品の鑑定などを行っていた同朋衆（どうほうしゅう）による文献「君台観左右帳記」の記述が基になっている。これらを踏まえ、曜変天目茶碗と確認されている茶碗は現在3点のみ。いずれも日本にあり、国宝に指定されている。（2017. 3. 16 読売）

実物を観たわけでもない素人がどうこう言える世界ではないが、件の碗はテレビ映像や新聞紙面の写真を見る限りでは、曜変天目茶碗の鑑定のポイントをクリアーしているようには見えない。むしろ、別の番組の映像で観た長江惣吉氏の作った碗の方がはるかに美しいと私には思える。

因みに放送倫理・番組向上機構は「茶碗が本物かどうかを判定することができない」として審議対象にしないことを決めている。（2017. 3. 16 読売）同機構としては致し方ないところではあろう。結局この話の結論はうやむやのままということか・・

## 国宝展では観ること出来ず

2014年10月15日から12月7日に上野の東京国立博物館平成館で日本国宝展が14年ぶりに開催され、終了間際の12月2日に行っ

てきたが、茶碗では京都孤篷庵所蔵の大井戸茶碗 銘 喜左衛門、三井記念美術館所蔵の志野茶碗等4碗の国宝が出品されていたが、曜変天目茶碗は出品されなかった。前稿で触れたが、1990年にやはり東京国立博物館で開催された日本国宝展では、龍光院の曜変天目茶碗が出品されていたが、私がそれを知ったのはずっと後のことである。

この龍光院所蔵の曜変天目茶碗は、2017年に京都国立博物館で開かれた国宝展に出展されたのだが、私がそれを知ったときにはもう展示替えがされていて残念ながら観ることは叶わなかった。

文化財保護法は、国宝を「たぐいえない国民の宝」と呼ぶ。歴史上・芸術上価値の高い建造物、絵画、彫刻、工芸品、書籍・典籍、古文書、考古資料に加え、学術上価値の高い歴史資料を有形文化財という、その中から重要なものが重要文化財として指定され、その中でも世界文化の見地から価値の高いものが国宝と定められている。調査官が選んだ候補を基に文部科学大臣が外部識者からなる文化審議会に諮問を行い、審議会は専門調査会の調査・報告を受け、大臣に答申し、官報告示によって正式指定となる。

国宝・重要文化財に指定されると、所有者・所在地変更の届け出義務が生じる一方、修理などに50～85%の補助が出る。

文化財保護の歩みは幕末・明治初期の廃仏毀釈の反省にさかのぼる。1871年の太政官布告、1897年古社寺保存法、1929年国宝保存法、1950年文化財保護法がそれぞれ制定等されてきた。（2014. 9. 11 読売、2014年、1990年の国宝展出品目録等より）

仏教伝来時は神仏習合であったが、明治元

年には神仏分離令によって江戸時代の仏教国教化策を否定し神道を国教化することとなり、全国に流行病のように廃仏毀釈運動が起こり、数多の仏像等が民衆の手によって破壊された。この破壊がなければ国宝は今の3倍くらいあるのではということも聞いたことがある。

前稿でも紹介した陶芸家の林恭助氏の曜変天目茶碗の展示会が2016年4月半ばにまた日本橋三越で開かれ、今回は現物を観てきた。相変わらず二度焼きをしているのか（この点については前稿を参照されたし）、綺麗は綺麗なのだが、斑文とそれ以外の部分が余りにも明確に分かれすぎて、あくまで林氏の手による加工物であって「窯変（ようへん）」ではないと私には思える。因みに幅13cm、奥行14cm、高さ7cmの曜変碗1,404,000円と値札がついておりました。同氏の作品は、江戸川アートミュージアムに展示されているようで、写真を見ると静嘉堂文庫所蔵のものにかなり近い感じのものにみえる。同ミュージアムはポートレース江戸川内とあるので、未だ行ったことはない。

## 本能寺の変と曜変天目茶碗

これについては前稿で触れたが、その後「光秀曜変」（岩井三四二著光文社2012年）なる本が出ている。明智光秀の家臣長岡兵部が光秀の生き様を、奇怪な曜変天目の茶碗に例えて語っているそうなのだが残念ながらまだ読んでいない。

## 陶磁器の評価の違い

陶磁器がらみで、もう一冊面白そうだが読

んでいないのが、有吉佐和子の「青い壺」（文春文庫）。2011.9.18付けの読売新聞の書評から抜粋すると以下のような内容らしい。市井の陶芸家が奇跡的に生み出した美しい青磁の壺を巡る連作短編集。売られ、盗まれ、十数年の歳月を経て、作者と再会するまでに、壺が照らし出す人生模様を描く。50年ぶりの同窓会で旅行をする女性たちの哀歓、縁日で3,000円で売られたこともあった青磁の壺を「唐物の名品」と鑑定する美術評論家……。青磁の価値が、持ち手の生き方によって目まぐるしく乱高下するさまが面白い。

骨董品、美術工芸品、陶磁器どれをとりあげてもその客観的価値などわかりはしない。個々人の主観によるものなのは当然だが、それなりの世間の評価というものも国によって、地域によって、時代によって異なってくる。であるからこそ、日本では国宝にまでなっている曜変天目茶碗がつくられた中国にはなく（かなり綺麗なかけらは見つかっている）、無名の修行僧が無上の名品としてでなく日本に持ち帰ることができたのであろう。当時の中国南宋で価値あるものとされていたら持ち出すことも入手することもできなかったはずである。

中国の文物を「唐物」と呼んで長く珍重してきた日本の場合、室町頃までに渡来したものを「古渡り」、江戸時代頃までを「中渡り」、明治以降を「新渡り」と呼んでおり、それぞれかなりテイストが異なっている。なぜかといえば、美術品のどこに価値を見いだすかは、時代により人により地域によって代わるからだ。新渡りのものは、その時代なりに研究が進んだため「中国で正統とされている美術作品」を輸入している。しかし古渡りになると、当時の中国での「ど真ん中」とは言えない作品が

多い・・・(クリステイズで落札された) 油滴天目の購入者が誰かは明らかにされていないものの、広く、長い射程で見れば、「日本ローカルの基準で評価されてきた中国美術」が世界的なマーケットで高値をつけたことは、単純な数字以上に面白い意味を持つのではないか。かつて本国とは少し毛色が違いながらも、日本で唐物として崇められた美術作品があり、それを範として日本独自の美術史が紡がれた。こうした作品が再び現地へ戻ること、その価値を包含する方向へと中国の美術史が変容していく—そんなダイナミックな往還運動が起こりつつあるかもしれないからだ。

(美術ライターの橋本麻里氏 2016. 9. 24 日経)

会計や税務の世界と絡めると、個人が趣味として集めたものでも、とてつもない値段で売買されたり、真贋如何によって相続税評価が大きくぶれたり、更にはオーナー社長の法人が売買相場のある記念コイン(通貨として使用できるもの)や古美術品を所有したりとなると甚だやっかいなことになる。最近でも、法人所有の世界の名器ストラディヴァリウスを減価償却してしまい面倒なことになっているらしい税理士もいる。貸借対照表に価値評価の点で怪しげなものが載っている場合、その公正な評価額をどう見たらいいのか、時価とは何か、そもそも取得価額自体に合理性はあるのか(プロと称する人の鑑定評価書が付いていてもそれをどう扱ったらいいのか)、減損処理はできるのか等、興味はあるものの実務上は係わりたくない世界である。

## 20年目にしてやっと訪れた鑑賞機会

懸案の大徳寺龍光院の曜変天目茶碗をやつと目の当たりにすることができた。過去 400

年一般には公開してくれなかったものを、滋賀県甲賀市信楽町の MIHO MUSEUM にて「大徳寺龍光院 国宝 曜変天目と破草鞋(はそうあい)」展と銘打って2019年3月21日~5月19日に公開されることとなった。如何せん不便な場所にあるため、国内ながら三越伊勢丹の旅行のツアーを申し込んだ。3月28日、29日の一泊二日であるが、当初税理士会の行事予定が入っており申し込みなかったが、その後その予定が変更になったため遅ればせながら問い合わせたところ、申し込みが多く募集人員20名は既に一杯となり、一組追加設定したがそれも一杯で、待機者が20数人あり、無理でしょうといわれた。それでも一応待機リストに入れて下さいと頼んだところ、出発間近になって大丈夫とのこと。どうやらもう一組追加編成したようで、その代わり追加グループの夕食は当初予定の菊の井本店ではなく美濃吉本店になります。がよろしいですかと言われたが、こちらの目的は曜変天目茶碗を観ることなのでそんなことで怯むわけがない。

それにしてもたかが茶碗に高い金を払ってわざわざ観に行く物好きの何と多いことか(え!私も…)

3月28日当日、11:17 東京駅発の新幹線にて移動、京都駅着、ジャンボ観光タクシー9台に分乗して MUSEUM へ向かう。滋賀県の、温泉はないけど琵琶湖のある草津(これが滋賀県草津のキャッチフレーズとのこと)、昔、会計監査の仕事で行ったことのある栗東を通り、忍者の里、甲賀市(こうかし)に入り、狸の信楽焼の前を通過してからも更に山深く分け入ってようやく到着した MUSEUM のなんと立派なことか。某宗教法人の関係するところのようであるが、敷地面積100万㎡。レストランもある床面積3,400㎡のレセプション棟から17,400㎡ある美術館棟まで立派な斜張橋

やトンネルを通過して 10 分近くもかかる。設計はルーヴル美術館のガラスのピラミッドやワシントンのナショナルギャラリー東館などを手がけた I. M. ペイで、桃源郷をイメージしたもののようである。

MUSEUM の地下のレクチャーホールにて館長の熊倉功夫氏と大徳寺龍光院ご住職小堀月浦氏による対談講演を拝聴した。テーマの「破草鞋 (はそうあい)」とは、一般的には役に立たないものとされる破れ草履のことをいい、一方の国宝と並記しているのは、あらゆるものが同等で、役に立たないものなどないということ为例えているようである (これぞ禅の教え)。

大徳寺龍光院は、慶長 11 年 (1606 年) 筑前福岡藩主黒田長政が、父君黒田孝高 (よししたか、如水じょすい、官兵衛) の菩提を弔うために創建された。初代春屋宗園 (しゅんおくそうがん) の後を継ぎ、堺の豪商津田宗及 (そうぎゅう) の子である江月宗玩 (こうげつそうけん) が龍光院二世となる。龍光院に津田家の蒐集した数多の名品が寄進され、江月の自筆史料をはじめ、祖師墨蹟、書籍、法具類、茶道具等多岐にわたる品々がほとんど当時のままの状態で遺されている。三つの国宝の茶室の一つで小堀遠州作といわれる「密庵 (みったん) 庵」の他「密庵咸傑 (かんけつ) 墨蹟」「竺仙梵僊墨蹟」「金剛般若経」「曜変天目茶碗」といった国宝や、「柿・栗図」「油滴天目 附 螺鈿唐草文天目台」「十六羅漢図」等の重要文化財を数多所蔵している。

熊倉館長によれば、「歴代の和尚たちは種々の作品や墨蹟を通して禅を、また、禅の生き方をとらえようとしてきた。だから、みだりに人に見せず、散らさず残ってきたんです。」(三越お帳場通信特集記事より) とのことで、そ

のため当時のままきれいに保存されてきた一方で、一般人にはなかなか観る機会が与えられてこなかったといえる。

さてやっと会うことのできた三つ目の曜変天目であるが、写真で観ていたものとは違った印象を受けた。小粒な斑文が思っていたより多くあり、360 度観ることができたので、何度も回って観てみたが角度によって上部は藍色、下部の一部は緑系のパラエバトルマリンのような光彩が見受けられる。底部は漆黑。照明は上部からのものだけで、外側は陰になって見にくい、シャープな感じを受ける、レクチャーホールでの対談時のご住職の「緊張した線」なる表現はもっともと思える。いずれにしても、静嘉堂文庫のものとも藤田美術館のものともかなり違った印象である。どれが一番気に入ったかといわれても選択に悩んでしまうが、強いていえば、外側は龍光院、内側は (現物は暗くてよく見えなかったのだが) 写真によれば藤田美術館のものが私には美しいと思える。もっともこれは、当日ショップで売っていた三碗の写真と並べたクリアファイルの写真を観ての感想である (因みにクリアファイル一点で 400 円也)。現物を同じ照明で見比べることなどできないので本当のところはわからない。別に甲乙つけるべきものでもない。とにかく、やっと三つとも観ることができた、万歳! もうひとつおまけに万歳!

国宝の曜変天目は三碗であるが、「大正名器鑑」には曜変の称をもつものとして六碗が挙げられている (詳しくは前稿参照)。その一つが前田利常以来加賀・前田家に伝来し大佛次郎所蔵であったものであり、今回龍光院の特別展とは別の展示で MIHO MUSEUM で観ることができた。国宝の三碗と同じく 12~13 世紀

の南宋時代のものであるが、内側の細かい斑文がそれぞれ発色してはいるが正直なところあまり美しいとは感じられず魅了されることはなかった。

ミュージアムショップで曜変天目茶碗として売っているものがあった。ショップで売っているものとしては結構良くできていて、今まで見たミュージアムショップものの中では一番それらしくはあった。とはいえ、作者の名前もなく、どのようにつくったものなのかもわからない。因みにお値段は税抜1,600,000円、税込1,728,000円。勿論買い（買え？）ませんでした。

## 結びにかえて

現在の龍光院のご住職のご意向なのか、最近、俄に所蔵の曜変天目茶碗を度々公開しているようで、長年観ること叶わず焦がれていた身にとっては、やっと逢えた嬉しさの一方で少々がっかりという複雑な気持ちもある。思えば2002年11月7日に藤田美術館、翌々日に静嘉堂文庫美術館と立て続けに観ることが出来たのに、大徳寺龍光院の三碗目を観ることができたのが2019年、その間に髪は白くなり、腰も曲がり、歯も抜けて・・・とまではいかないが、まあ随分と時が経ってしまった。しかし、とにかく完結することができた、それを素直に喜ぶこととしよう。